



校長 坂本 晋

みたけが原便り

第14回 「想像する力」

(5月全校朝会講話より)

中間考査が終わって週末はゆっくり過ごせたでしょうか。今日から附中は通常授業に復しますが、日本は依然として新型コロナウイルス禍の嵐の中にあります。岩手県だけが全国で唯一感染が確認されていませんが、これは「幸運な偶然」です。この幸運はこの先もずっとそうであることを保障するものではありませんので、この後も警戒を怠らず「正しく賢く」対処していきましょう。

ところが、こうした状況が続くと、人の心の中には往々にして錯覚が生まれます。それは、「自分だけは大丈夫!」「自分は感染していないし、これからも大丈夫だろう」という、根拠のない自信です。覚えているかな?4月にはこの錯覚を「正常性バイアス」といいますと紹介しました。

この「自分だけは大丈夫!」とってしまう人には、実はあるものが足りないという共通点があります。そのあるものとは何か?

それは「イメージーション=想像力」です。「今、自分が症状の出していない感染者だったら何が起きるのか」「この人混みに混じるとどんなリスクが生じるのか」「そういう軽率な行動を他の人はどう思うのか」、こういったことを想像する力が不十分だという共通点です。

「他の人はどう感じているんだろう?」「不安を感じている人や弱い人、困っている人に今自分ができることは何だろう?」という思い。それを「イメージーション=想像力」と言って難しければ、「思いやり」や「優しさ」、「誰かを気遣う気持ち」、「共感する心=シンパシー」と言い換えてもよい。

ここで皆さんに紹介する人がいます。京都大学に霊長類研究所というところがあるんですが、その所長をしていた松沢哲郎(てつろう)さんという人です。チンパンジーの研究では世界の第一人者といわれています。以前、松沢先生の書いた「想像するちから」という本を読みました。それによるとチンパンジーと人間のDNAの塩基配列は99%同じなそうです。

これが意味することは何か?つまり、生物学的・遺伝学的には人間とチンパンジーはほとんど同じだということです。でも、実際はかなり違ってきますよね。では両者を決定的に分かつものは何か?もう分かりますね!松沢先生によると、それは「想像力」を持っているか否かなそうです。つまり、「人間は想像する生き物だ」ということです。

それを知って「ああそうか」と思った事があります。中国の故事に「朝三暮四」という言葉がある。「朝に三つ夕暮れに四つ」と書く四字熟語。その昔中国で猿の群れを可愛がって毎日餌をあげている人がいたんですが、だんだん貧乏になってきたので餌代を減らそうと一計を案じました。「ひとつ相談があるのだが。明日からお前たちにやるドングリを朝に三つ、夕方に四つにしたいがどうだ」と言ったら猿たちは「そりゃあないよ、少ないよ!」と足を踏みならして怒った。そこで「よしよし分かった。じゃあ朝に四つ、夕方に三つならどうだ」と言ったら「それならOK、いいよ」と猿たちは喜んで受け入れたという話です。

つまり、猿たちは「今日の前にある直近の世界」だけに生きていますね。今が良ければ満足、それでいい。だから猿たちは「絶望」するということがありません。先々のことを考えて恐れたりあれこれ心配したりしない。想像力

の持ち合わせがないからです。

それに対して、私たちは想像力を持っています。明日のテストのことを考えて心配したり焦ったり、将来のことを思って不安になったり時には絶望することもあります。何だか損をしているようですね。でも、「絶望するということ」は裏を返せば、今がどんなに辛く苦しくても、それでも「希望を持って生きることができる」ということです。希望を抱けるのも想像力のなせる技です。それが人間です。

皆さんの中には、正直、「自分が何をしたいのかまだよく分からない。自分探しの時間がほしい」、という人もいます。中学生なんですから当たり前です。

本当は、「自分に合った道が何なのか確かめたい、いろいろ体験しながら探せばいい」これが本音です。しかし、現実には、「医者アルバイトをしたらやり甲斐があったので目指すことにした」とか、「弁護士をやってみたら面白かったので挑戦したい」というわけには、なかなかいきません。

その未経験を補って、中学生である皆さんを誘う羅針盤・パイロット役をしてくれるのが、「想像する力」＝「イマジネーション」です。そしてそれを鍛えるのが教室での先生方や友だちとの対話であり、教科書や本を読むといった日々の学びです。

新型コロナウイルスも目には見えませんが、「想像力」＝つまりは附中生らしさを発揮することで実態を正しく捉え、賢く対処していきましょう。

最後に、ひとつ皆さんに想像力のテストを試してみます。

こんな話です。

ある若者が、銭湯で、(何か事故でしょうか)右腕の肘から先がない男性を見かけて勇気を出して声をかけたんです。「あの、背中を流しましょうか？」その男性は若者の好意に甘えたそうです。「すみません、お願いします。」

若者はゴシゴシと自分のタオルで力を入れて背中をこすると、照れくさかったのか、お湯を流すとじゃあと云ってサッと行ってしまった。

その出来事を男性は後で友達に話しました。「この前銭湯で背中を流してもらったよ。最近の若者も捨てたもんじゃないね。」すると、友人はそのことを語る男性の穏やかな表情に、何かピンと来るものがあったんですね。尋ねてみたそうです。「きみ、嬉しかったんだろ?」「ああ」「ほんとに?」「もちろんさ」それでも、友人がしつこく尋ねると、男性はとうとう白状しました。

さて、「うん。背中を流してもらうのもありがたかったんだけど、ホントはね・・・」と言って男性が話したことは何か。想像してみてください。誰かいかがでしょう?

はい、あとは宿題、ということにしちゃうと、ちょっとイジワルですね。

男性はこう云ったそうです。「本当はね、一番手を貸して洗って欲しかったのは・・・背中よりも・・・左腕だったんだ」。背中は何とか自分で洗えても、ふだん大車輪の働きをしている左腕だけは、さすがに自分では洗えないんですね。

「想像力・思いやり」と口で言うのは簡単ですが、なかなか一筋縄ではいきません。

でも手強い相手ほどいったん懐に入れてしまえば最強のパートナーになってくれますので上手に手なずけていきましょう。

